

思春期後の症例における拡張した尿管口に対応した手技を用いた内視鏡的逆流防止術

Anti-reflux endoscopic injection therapy in post-pubertal patients via techniques adopted
for the dilated ureteral orifice: a retrospective single-center study

丸山 哲史（名古屋市立大学医学部附属東部医療センター 泌尿器科）

この度、日本小児泌尿器科学会より優秀論文賞（臨床研究部門）をいただきました。少数例の臨床研究でありながら、このようなご評価をいただき身に余る光栄と存じます。ここでその内容を紹介させていただきます。

膀胱尿管逆流（VUR）は有熱性尿路感染の主因で、手術治療の基本は膀胱尿管新吻合により壁内尿管の長さを延長する点にあります。これまでに様々な手術療法が工夫され、開腹術が標準術式とされて来ました。最近では腹腔鏡下手術またはロボット支援下手術により更に繊細な手術が可能となっています。一方、内視鏡的注入療法も基材の改良と手技の工夫により根治率が高まっています。又、その低侵襲性は他の手技にはない特徴といえます。

本論文は成人女性を対象とし、VUR に対する内視鏡的注入療法の工夫と手術成績をまとめたものです。成人症例の 70%以上では尿管口が大きく開大しており、小児用内視鏡を尿管内へ挿入することが可能でした。直接尿管内へ挿入する手技を用い、適切な位置及び方向での基材（デフラックス）の注入が可能となりました。子宮筋腫や低緊張性膀胱を伴う症例では、壁内尿管が屈曲し視野の確保が困難でしたが、ガイドワイヤーを用いた手技の有効性を明らかにすることができました。

本論文の結果からは、内視鏡的注入療法が低侵襲性を重要視する AYA 世代の成人女性に対しては選択肢の一つとなることが示唆されました。本論文で得た知見を基盤として、さらに手技を改良し長期成績の向上に努めてゆく所存です。